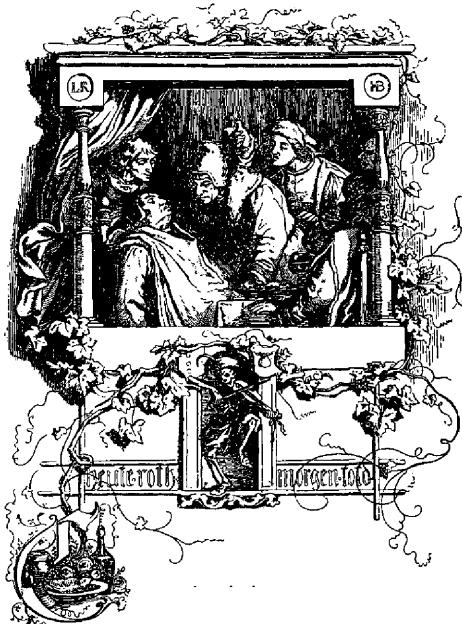


沈黙の恋 序の巻

J・K・A・ムゼーウス著

鈴木 満訳



昔々、ブレーメンのメルヒオールと呼ばれる富裕な商人(一)があった。この御仁、新約聖書の例の金持(二)の男がお説教の種にされるたび、自分と較べれば高(三)が小(二)あきんどだ、と鬚(ひげ)をかき撫でながらにんまり嘲笑(ほこま)つたもの。金子がどつさりあつたので、食堂の床を良質のターラー銀貨(三)で舗装させたくらい。あの儉しい時代にも今日と同様ある種の豪奢な浪費はあつたのである。ただし、父祖の場合、子孫よりもずっと手堅い性格のものだったという違いはあるが。こうした傲慢不遜な行為は市民仲間や同業者たちからひどく悪く取られ、ひけらかしなんぞしあつ

て、と言い触られたが、それでも羽目外しというよりむしろ商人らしい投機ではある、と看做された。この日から鼻へ抜けるブレー・メン人、思いあがつた虚榮と見えるこうした所業をやつかんだり、非難したりする連中が彼の豊かさぶりを広めてくれ、信用を高めてくれることを見越していたわけ。この目的は完全に達成された。かように思慮深く食堂で展覧に供されているターラー古銀貨なる死んだ資本は、これがあらゆる商館で対価を約束する沈黙の担保となつてお蔭で、百倍もの利息をもたらしてくれた。けれども結局のところ、やがてこれが順風満帆の当家が座礁する巣根になつたのである。

ブレー・メンのメリヒオールは鮓料理の宴会の折、身辺整理の違も無いまま頓死してしまい、全財産を花も盛りの青春にある一人息子に残した。この若者は父の遺産を適法に受け継げる年齢に丁度達していたのである。フランス・メリヒヤーザーン「メリヒオールの子フランツ」は素晴らしい青年で、天性この上もない資質を授かっていた。均整の取れた体つきは、頑丈で強靱、気立ては明朗で磊落。まるで燻製の牡牛の肉と年代物のフランス葡萄酒が彼の心身をこしらえあげたかのよう。両の頬は健やかな色艶、蒼色の目は屈託なく天真爛漫な若さに輝いている。すくすく生育するには水と貧弱な土壌で充分事足りる頑強な植物にさも似たり。けれどもこういうのは、土地が肥沃過ぎると勢い猛に生い茂りはびこって、実をつけらるもなにもあらばこそ、になつてしまふ。よくあることだが、「父の遺産が子の破産」というやつ。大層な身代の持ち主となり、好き勝手にそれが遣えて嬉しい、と思つたのも束の間、今度は肩の重荷に他ならなくなつたこれを厄介払いしようとしたし始め、文字通り新約聖書の金持ちの氣になつて、連日すてきな歓楽に明け暮れる。司教の御殿の饗宴だつて、豪勢で贅沢な点、彼のとは比較にならない。ブレー・メン市開闢以来、毎年フランスが宰領する習いとなつた牡牛祭は前代未聞。というのは市民一人ひとりに香味焼肉とイスパニア葡萄酒の小さい壺を振舞つたのである。そこで市は挙げて、ご老体の息子殿万歳（1）、と歓呼し、フランツは時

の英雄となつた。

こうして飲めや歌えの歡樂に打ち続き耽溺している最中、貸借対照表に思いをいたすことなどありはせぬ。これこそ昔の商賈のいろは。もつとも現今はだんだん用いられなくなつてゐる。さればこそ、商い秤の指針が磁力に引かれて破産に傾くのだ。幾年か過ぎたが、ぱつぱと遣い放題の椋鳥殿、実入りが減る一方なのにとんと気づかずじまい。なにしろ父親が亡くなつた折には、お金がお蔵にどつさりこ、だつたのでね。がつがつ群がる陪食仲間、吹けば飛ぶようなのらくら者ども、遊び人に穀潰し、並びにこの放蕩息子にたかつて甘い汁を吸つてゐるその他もろもろ、こういう手合ははフランツがいくらかでも考え深くならないようよくよく用心、この嬉しみ、あの樂しみととしょつちゅう引っ張り回し、せつかくの獲物がふいと素面になつて分別を取り戻し、こいつらの貪婪な鉤爪からすっぽり逃げ出さないようにと、ろくさま息もつかせなかつた。

けれどもお大尽暮らしの水の手がはたと切れ、父が遺した黄金の樽は底の濁に至るまですつからかんとなつた。ある日フランツが多額の支払いを命じたところ、番頭は主人の約束手形を決済できず、拒絶証書を添付して返したのである。贅沢息子はこれが大いに瘤に障つた。もつとも、意に逆らつた使用人に腹を立てご機嫌を悪くしてみたものの、だからといって、自分の経済状態が芳しからぬことになつたのは、この男の資産運用がなつてないからだ、とは絶対に言えぬ。で、原因究明に努めようとせず、埒も無い繰言をありきたりにぶつぶつ唱えてお茶を濁し、何十遍もこんなちくしょうを連発したあげく、肩をすくめる番頭にご下命あそばしたのは、スバルタ人みたいな一言の「なんとかしろ」。

そこで出番となつたのが、高利貸かつ両替商である金銀周旋業者。間もなく、目の玉の飛び出るような利子と引き換えに、莫大な金額がからつぽだつた金櫃に流れ込む。それというのも、良質のターラー銀貨が敷き詰められた例の



広間はその頃、十八世紀の今日アメリカ大陸會議の公開信用状、あるいは連邦十三州全ての公開信用状にも増して、債権者の目には価値があつたのである。この一時抑えの対症療法、しばらくの間は大いに効き目があつた。しかし、食堂の銀の舗装はこつそり剥ぎ取られて舗石に替えられた、との噂がひそひそと広まると、貸し主たちの要求で、事の真相は即刻検証され、事実である、と認定された。嵌石細工^{モザイク}の彩り豊かな大理石の床が鈍色^{にびいろ}の古銀貨より遙かに美しく見えたことは否定できない。けれども債権者たちは、家の主人の洗練された趣味にはろくすっぽ敬意を払わなかつたので、遅滞なく返済を催促。これが果たされないと、破産審判が開かれ、父祖の館は数々の倉庫、庭園、農地といつた付属不動産の全^(レ)て、およびあらゆる動産もろとも燃える蠟燭のもとで競売に掛けられ、持ち主は、自衛のためなおいくらかの法的な対抗策を講じて防波堤を築こうとしたものの、法律に基づいて強制退去を命ぜられた。

さて、こうなつてみると、おのが無思慮についてあれこれと考察をめぐらすのには遅すぎる。なにせ、どんなに賢明な分別を働かせようが、どんなに有益な決心を固めようが、今さら取り返しがつくものじやない。当節の洗練された思案に従えば、これで立役者はきつぱり見得^{みえ}を切つて舞台から退場、広大な世の中へ長旅に出るか、さもなければ、ごろごろと息を引き取るかといった具合に、なんらかの方針でおのれの存在を抹消しなければならなかつたところ。なにせ名譽ある男子として故郷の町でもはや生活することがかなわないからである。けれどもフランスはどちらもや

らなかつた。ゴール「フランス」風の道義心が恩行や無分別を抑制する馬勒や馬銜として考へ出した例の世間の思惑⁽²⁾なんて、裕福だった時にはこのどら息子、ついぞ思いもしなかつたし、やりたい放題の浪費が恥ずかしいと感じるほど彼の感覚は洗練されていなかつた。フランスの気分は酒の陶酔から醒めたばかりで、我が身に何が起つたらとんと分からぬ酔っ払いのようなもの。破産した放蕩者の定石通りの暮らしを始め、身を恥じもせず、悲しみもせぬ。幸い家伝来の装身具のうちいくばくかの遺物を難破からこつそり持ち出していたので、しばらくの間は赤貧洗うがごとき暮らしからなんとか免れた。

彼は町外れの路地裏にあるとある宿に引き移つたが、そこは一番日の長いころ高い屋根の向こうにちよつびり姿を現すのを例外として、一年中お天道様が拝めないという所。今はもう欲望が極めて限られていたから、ここではフランスに必要なものがすべて見つかつた。宿の主人の質素な台所は飢えを、部屋の暖炉は寒さを、屋根は雨露を、壁は風を防いでくれた。もつとも遣る瀬無い退屈という代物に對しては凌ぐ思案も逃げ道もなかつた。取り巻きだつたのらくら者どもは財産が無くなつた途端いすこへともなく雲隠れしたし、昔の友だちときたら誰も彼も知らんぶり。読書はまだ時代の欲求ではなく、今日普通ごく單純な人々の頭にもふわふわしているあの脳足りんな幻想遊戯で時間潰しをやらかす術はまだ知られていなかつた。お涙頂戴物語、教訓譚、心理小説、滑稽話、民衆文学、お伽話の數数は皆目⁽³⁾。ロビンソン・クルーソー風物語⁽⁴⁾（ロビンゾナーデ⁽⁵⁾）も、家庭小説⁽⁶⁾も、修道院物語も一向。プリンププランブープラスコ連⁽⁷⁾も、カーケルラクどもも居合わせず、あの世にも味氣ないローゼンタールの家族親戚一同も、のんべんだらりと無駄口をたたいて、読者諸賢の忍耐を擦り切らせてはいなかつた。さはさりながら騎士たちはこのころもう既に馬上槍試合場で勇猛果敢に駒を乗り回していた。ベルン「ヴエローナ」のディートリヒ、ヒルデブラント⁽⁸⁾、角あるザイフリート⁽⁹⁾、強者レンネヴァルトといった面々は巨龍や大蛇退治におもむき、巨人たちや十二人力の小人たちを征服



していた。⁽¹⁹⁾畏敬すべきトイアーダンクはドイツ流の礼儀作法のこの上もない典範であり、当時につくつては我らが祖国の機知の最新の所産であつた。もつともこれをもてはやしたのはこの世紀の優雅な才人たち、文人たち、思想家たちで、フランスはこうした階層の一員ではなかつたから、なんとか暇潰しのよすがにしたのは、円胴弦楽器⁽²⁰⁾の弦を合わせて、時折ぱつんぱつんと爪弾くことぐらい。でなければ、気分転換に窓から外を覗いて、天候観測を執り行うのが関の山。ただしこれは腹にガスが溜まつた当世の気象学者の無駄な労力と同様ろくすつぽ成果は得られなかつた。けれどもフランスの観察意欲はやがて別の甘美な対象を発見、ために頭と心にぽつかり明いていた空洞は突如満たされたのである。

この狭い小路には、彼の部屋の丁度真向かいに、あるれつきとした年配のご婦人が住んでいた。彼女はもつと増しな将来を楽しみに、長い糸で細細と生計を立てていた。この糸といふのは、素晴らしい美しいその娘と一緒に糸巻き棒を使つて紡ぎ出したもの。二人は日がな一日糸を引き出していたので、やろうと思えば、ブレーメン全市を市壁と濠と周辺区域残らずをひつくるめて、樂樂糸で囲んでしまふことができただろう。この二人の糸紡ぎ女、元来糸紡ぎ棒を操るためになまれついたのではない。良家の出自で、以前はのんびり裕福に暮らしていたもの。麗しのメータの父親は海船一隻の所有者で、自身これに貨物を積み込み、これに乗つて毎年アントウェルペン⁽²¹⁾に航行していた。けれどもやがてひどい嵐に襲われて船は沈没、乗り組みは一人残らず豊かな積荷と一緒に海の藻屑と消えた次第。メータはその時はまだ子ども

の域を脱していなかつた。母親は分別のあるしつかりした女性で、夫も全財産も失われたことを毅然とした賢明さで耐え忍び、窮乏生活に陥つたのに、友人やら親戚やらが慈善心から同情して援助を申し出たのを、体を張つて仕事をし、せつせと両手を動かしてご飯が食べて行ける限り、他人のお恵みは受けたくない、と考えて全て断つたのである。このご婦人、宏壯な邸宅とそれに備わつた什器^(じゆう)一切を、不慮の死を遂げた夫の厳しい債権者たちに委ね、狭い小路のちつぽけな住まいに引き移り、朝早くから夜遅くまで糸を紡いだ。こうした生計^(じづき)は苦しいもので、幾度も糸を熱い涙が濡らしたのだったが。けれども倦まずたゆまず働いたお蔭で、だれにも厄介にならず、負い目のある人なんぞ無い、という究極の目的を達成。ついで彼女は、大人になり始めた娘に同じ手わざを伝授し、几帳面な暮らしに徹したので、収入からなにほどの蓄えを積み立て、これを活用して傍らささやかな亞麻の取引きを行ふようになつた。

しかしながらこの女性は生涯をこうした窮乏状態で終わらうなどとは毛頭考えていなかつた。むしろけなげにも、未来の展望は開けていた、と胸を張り、他日再び何不自由ない暮らしにもどり、人生の秋となつたら小春日和をのんびりと楽しみたい、と思っていた。このような樂觀はまんざら空しい幻想から來ているのではなく、思慮深く計画的な予想に基づいていた。彼女は娘が春の薔薇のように花開くさまを見ていた。その上この乙女は貞潔でしとやか、それから理知の面でも情緒の面でもなんとも数多くの資質に恵まれてゐるので、母親は娘に接すると喜びと慰めを感じ、この子が相応のきちんとした教育に事欠かないよう、自分の口に入れる物も切り詰めるのだった。というのも、あの賢い女性愛好家ソロモン⁽²²⁾が描いた完璧な妻の理想像の素描^(スケッチ)(3)通りの乙女がいるとしたら、そうした貴重な真珠は必ずれつきとした男の家の宝飾にと搜し求められ、値段の掛け合いになるに決まつてゐる、と彼女は考えたからである。なにしろ、美貌と貞潔が一つに合わさった場合、ブリギッタ母さんの時代には、今日の親族だくさんでお金持ちという条件とまったく同様、求婚者の目には価値があつた。その上今日より結婚しようという競争相手も多かつた。

その頃は、お上品な経済理論によるものではなく、家の切り盛りをする上で妻こそ最も大切な、全くべからざる家財だ、と信じられていたのである。麗しのメータは野天では無く温室育ちの貴重な稀種の花のように咲き匂っていた。彼女は母親の目配りと保護のもとで引き籠もつた静かな暮らしをしており、遊歩道や寄り合いに姿を現すことはついぞ無かつた。生まれ故郷の市の外に出たことは一年を通じてほとんど一回も。こうしたことは母親の健全な子女教育法の諸原則に背馳しているように思われた。メーメル在住のあのE***老夫人の考え方はこれと異なり、ありありと分かるのだが、ひとえに良縁を結ばせようとの思惑のため、ゾフィーをはるばるメーメルからザクセンまで旅行させ、意図を完全に達成したのである。この放浪の蠱惑の美女はどれほど多くの心に火をつけたことか。どれほど多くの競争者が彼女に求婚したことか。もしゾフィーが家庭的な淑やかな女の子としてじつと故郷に留まつていたら、もしかすると箱入り娘の箱の中で枯れ萎れてしまつたかも知れない。キュップーツ修士すら征服しないままに。時代が変われば習俗も別。今日のドイツにあつては娘たちは利潤を生むなら是非とも流通させねばならない資本なのである。かつて彼女らは貯金のよう^(四)に錠と門でしつかり守られていたけれども、両替商は財宝がどこに隠されているか、どう運用すべきかちゃんと心得ていた。ブリギッタ母さんは、自分たちを狭い小路というバビロンの囚獄から乳と蜜の流れれる豊饒の国へといつの日にか再び連れ戻してくれる裕福な婚殿を目指して舵を取つていたのである。そして、運命の籠箱が娘の籠とどこぞの空籠と組み合わせることなどはしないだろう、と固く信じていた次第。

ある日のこと、ご近所の住人フランツは、天候観測を執り行うために、窓から外を眺めたもの。その時目に入つたのが魅力溢れるメータの姿。こちらは母親と一緒に毎日のおミサ聴聞^(五)を欠かさぬ教会から戻つて来たところ。幸いこの男、のらくらしていた遊蕩兒時代に、ご婦人がたにはついぞ目を向けたことが無く、繊細な感覚はまだ胸中ですやすやねんねしていく、あらゆる官能は奢侈逸楽の絶え間ない陶酔にいわば麻痺させられていた次第。いまや羽目を



大部分は既に私どもが先刻承知のことを聞かされたのである。

するとまず襲つたのは軽はずみにも金を湯水のように蕩尽してしまつたことへの後悔、それから胸にじわじわと湧いて来たのが新しい知己に対するひそやかな好意。そしてひとえに愛らしいメータの婚資調達のために、父親の遺産を再び我が手に取り戻したい、と考えた。この狭い小路界隈はフランスにとつてとても好ましいところとなつた。シユッティング（4）とだつてここを取替えはしなかつただろう。愛する乙女を一目見る機会を窺おうと彼はもう一日中窓辺から離れず、彼女の姿が見えるたび、初めて金星が太陽面を通過するのを見たりヴァプールの天体観測者ホロツクス（28）が感じたより、ずっとぞくぞくする歓喜を心に覚えるのだった。

用心おさおさ怠り無い母親があちらからも監視をしていたのは運の悪いこと。彼女はすぐに向かいの暇人（ひまじん）がたくら

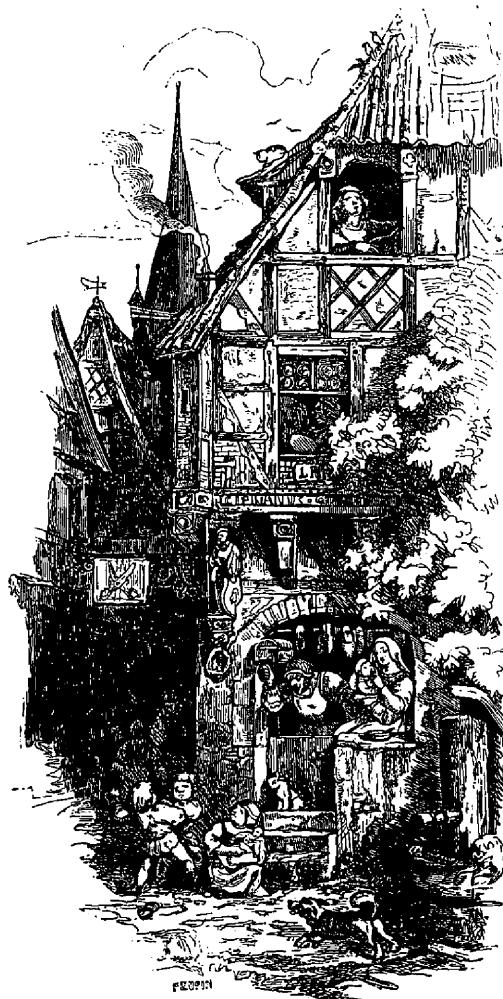
んでいることに気づいた。そしてこの青年、そうでなく放蕩者と思われて彼女にはまつたく信用が無かつたから、連日の凝視に腹が立ったのなんの。そこでブリギッタは窓掛けをびつちり閉じて、窓を面紗^{マスク}の雲で覆つた次第。メータは、もう窓辺に姿を見せてはいけません、と厳しい言いつけを受けた。それからおつかさんはミサに出かける折には毎度、娘の顔に雨避け布をかぶせてトルコ大帝の側室かなんぞのような格好にし、小路の角を二人で曲がる時にはそそくさと足を速めて待ち伏せの目から逃れるのだった。

まつたくのところフランスは数ある才能のうちでも特に明敏さで聞こえたわけではなかつたが、恋は全身全靈の力を奮い起こせるもの。あつかましい覗き見で下心が露見したと見て取ると、たとえ聖体の行列⁽¹⁾通り過ぎたって二度と再び外は眺めないぞ、と決意してすぐさま窓辺の哨所を撤収、それでも気づかれずに観測を継続できる代案は無いか、と思案をめぐらし、発明の才のお蔭でさして苦労もせずにこれに成功した。

彼は見つけうる限りで最大の鏡を借り入れると、これを隣人の女性たちの住まいに起ることがなにもかもはつきり見えるような方向に向けて自分の部屋に設置したもの。さて、幾日か経つても待ち伏せの気配がまるで感じられなくなつたので、窓掛けはだんだんにまた開けられた。そこで大きな鏡はときたま素晴らしい乙女の姿を受け止め、これを映し出したので、鏡の持ち主は大いに目を楽しませたのである。愛⁽²⁾が青年の心に深く根を張れば張るほど(5)、希望はますます膨れ上がつた。いまや肝心なのは、麗しのメータに思いのたけをあからさまにして、彼女がこちらをどう思うか探り出すこと。恋する者たちがその好みやら願いやらの状況に応じて探るのが常である、穏当かつ最も広く行われている手段は、フランスの現況では全く不可能だつた。慎ましやかな当時にあつては恋に陥^{おち}ちた雅び男が深窓の令嬢と近づきになるのはそもそも難しいこと。化粧室でのご機嫌伺いはまだ習俗にはなつていなかつた。二人つきりでの親しい出会いなんてことは禁忌^{タブー}もよいところ、女性側からすれば悪い噂がぱつと立つ原因だつたし、遊歩道^{プロムナード}、

広場^(エスプラード)、仮面舞踏会^(マスクフーラード)、野外での食事^(ピクニック)、おやつ^(グリテ)、夜食^(スープ)といった、甘い恋の手助けとなる近代の英知の所産はまだ無かつた。男女両性が心に掛かるあれこれを解明するため語り合うのを許されるのは秘められた閨房のみ。とは言うものの、当節とご同様、何もかもうまく運行していたのである。名付け親などを介してのお交際^(つきあい)、披露宴のご馳走、葬式のあととの会葬者へのおもてなし、こういうのがとりわけ神聖ローマ帝国直轄の諸都市では恋愛を紡ぎ出し、縁談を推進する格好の場だった。それゆえ昔の格言にいわく。新しいのが思いつかれぬご婚礼などありはせぬ、と。けれども尾羽打ち枯らした贅沢屋を宗教上の親戚に迎え入れようなんて御仁はありつこない。だからフランスは婚礼の宴^(うたげ)にも葬式振舞いにも招かれなかつた。交渉役を務めてくれる腰元やら年若な女中、あるいはまた同類項の奉仕の靈^(ラグ)（召使）を案内人とするうねくね道はこの場合通行不可。ブリギッタ母さんには女中も腰元もいない。亞麻と糸の取引きはただ彼女の手を通るだけだし、それに娘は自分の影同様傍から離しはしないという有様。

こうした状況の下ではご近所の住人フランスがいとしのメータに、口頭であれ書面であれ心情を吐露することなど問題にもならぬ。けれども彼はやがて、明らかに恋の告白のために作られたとおぼしき特殊表現を考え出した。なるほど第一発見者の榮譽は彼に与えることはできない。どうの昔からフランス、イタリア、イスパニアなどの多情多恨の雅び男たちが、小夜曲^(セラードン)といやつで、意中の女性^(ドントン)の露台^(バルコニー)の下から気持ちを蕩かせる和音^(ハモニー)、心の言の葉^(コトハ)を語り掛けたもの。で、この旋律に乗った熱情がその目的である愛の宣言に失敗することはまず無いそうだし、ご婦人方が打ち明けるところによれば、聞く者の心をつかみ、奪うこと、昔のクリソトムス教父の修辞、あるいは、格調正しいキケロやデモステネスの雄弁なんぞ足元にも及ばぬ由。けれどもこの単純素朴なブレーメン子はさようなことをついぞ耳にしたことは無かつた。従つて心のだけを樂の音に移し変え、ラウテの響きに載せていとしのメータに伝えるといふこの發明は、徹頭徹尾彼の新案特許であつた。



遣る瀬無い思いに

駆られていたある折、
フランツは楽器に手
を伸ばしたが、今ま
でのようすに单なる爪
彈きでは満足せず、

調和した弦から人の
心を揺さぶる調べを
誘い出した。そして

一箇月足らずのうち
に恋は冴えない楽師

を新たなアンフィオ

⁽³⁴⁾
ンに生まれ変わらせたのである。最初の何回かの試みは格別気づかれたようではなかつた。しかしまもなくこの
音楽名人ヴァイオリンが和音を一つ響かせると、狭い小路でだれもが耳を欹そなだてた。母親たちは子どもを黙らせ、父親たちは騒が
しいがきどもを家の外に追い出す。そしてフランツは、自分が前奏を始めた時、時折メータが雪華アラバスターの石膏のような手で
窓を開くさまを、鏡を通して認める嬉アレグロしいのなんの。乙女が楽の音に耳を貸したということは、うまく相手を引き
寄せたのに他ならなかつたから、若者の幻想は愉快な快速曲となつて高鳴り、あるいは諧謔調の舞踏曲となつて駆け
回つた次第。けれども紡錘の活動や忙しげな母親のために彼女がそうできないでいると、陰鬱な緩徐曲アンダンテがうめくよ

なラウテの駒を越えて流れ出し、せつない転調で苦痛を完全に表現、恋の懊惱を自らの魂に注ぎ込むのであった。

メータは物覚えの悪い生徒ではなかつたから、この表現豊かな言葉がよく分かるようになつた。彼女は、自分が全てをちゃんと解釈できたかどうか調べるため、何度も実験を試みた。そして、姿の見えないラウテ演奏者の名人気分を好き勝手に操ることを発見。と申すのも、物静かで淑やかな乙女らは、蝶蝶みたいな浮気心で男から男へとせかせか気を移し、だれか一人に注意を集中することのない、軽佻浮薄な女どもとは比較にならない鋭い心眼を持つているものだからで。彼女はこのことで女性らしい自尊心がくすぐられるのを感じ、神秘な魔力に突き動かされるまま、このご近所のラウテに、ある時は歓喜の調べを、ある時は噎び泣く悲嘆の調べを奏でさせることができるのが気に入つた。ブリギッタ母さんはと、細細した生計のことで頭が一杯だったので、そうしたことに一向気づかずじまい。それに抜け目の無いお嬢さんの方も母上に新たな発見を知らせないようよくよく用心、むしろ、クウクウ求愛の鳴き声を寄せる隣人へのある種的好意から出たものにせよ、自分の解釈学上の鋭い洞察力を明示したい、との虚榮心に由来するにせよ、自分の心に呼びかけるこの旋律の声になにか象徴的な返答で応える機会を見つけよう、と思案を廻らしていた。彼女は窓辺にいくつか草花の鉢が置きたいとの要望を表明。こうした無邪氣な楽しみを娘に認めることはおつかさんにはなんの問題もない。なにせ、待ち伏せして見張つている隣人はもはや目にしなくなつていたので、こやつのことなど全然気にしていなかつたから。

さてメータは、草花を世話し、水をやり、強風から保護し、育て上げ、それらが成長し花開くのを見守る、という仕事を手に入れた。幸運な求愛者はこうした神聖文字ヒエログリフを徹頭徹尾自分に有利なことと解釈し、筆舌に尽くしがたい歡喜に酔い痴れた。そして雄弁なラウテは狭い小路を越えて、美しい草花愛好家の聴き入ってくれる耳に、青年の嬉しい気持ちを伝えることに孜孜として倦まなかつた。これは優しい乙女の心に奇跡を起こしたのである。ブリギッタ母



に関心があるのでなく、会話を盛り上げるのが目的、と見せかけるよう用心深く気を配った。

ブリギッタ母さんが自分のうちでやんちゃ坊主を熱心に非難しているのに対し、こちらはそれにもかかわらず彼女のためによかれと思案を廻らし、できるだけあちらの窮乏状態を改善し、自分にまだ残されている僅かの財産を彼女と分かち合いたい、ただし、彼女にはまったく内密のまま、自分の財産の一部をあちらに移したい、と真剣この上ない考察に耽っていた。もとよりこの気前の良い寄進の狙いは元来母親ではなく娘の方。麗しのメータが新しい長衣を欲しがったのを、母親が、この節は不景気だから、との理由で買うのを拒んだ、ということをフランツはひそかに聞き知った。もっとも彼は、どこのだれとも知れない者からの贈り物とか衣服はまずまあ受け取ってもらえない、あるいは、娘がそれを着たがりはしない、それから、自分が寄進者だと名乗りたがる限り万事台無にしてしまう、とは重重わきまえていた。こうした厚意を極めて巧妙に実現する機会がそのうち偶然不意に到来。

さんが、時折娘と小一時間も語らうこともあるその賢明な食卓座談で、音楽好きな例のお隣さんのことと批評し、役立たずだとかのらくら者だとか非難したり、あるいは放蕩息子(35)にたとえたりするたび、ひそかに気を悪くするようになったのである。彼女はいつもフランスの肩を持つて、浪費の罪を犯したのは悪い人たちが唆(ミソシカ)したからだとし、「若者よ、資産を惜しめ」というあの金言を考慮しなかつたこと以外は、何一つ彼の責任にしなかつた。

しかしながらメータは彼を庇う際、自分自身がそのこと



ブリギッタ母さんが近所のある女にこうこぼしたのである。亞麻が不作で、お顧客さんたちが払つてくださるお代より仕入れ値段の方がかさんでしまいましたね。ですから、当分の間こちらの稼業は到底當てになりません、と。立ち聴きしたフランツは二度と言わせすぐさま金細工師のもとに走り、母の遺愛の耳飾を売る、何シユタイン(33)かの亞麻を購入、仲間に引き込んだある女仲買人から低廉な価格で隣人に提供させたのである。取引は成立、大いにうまくいったので、麗しのメータは万聖節(35)になると、新調のローブであでやかに装つた。垣間見(かいまみ)しているこのお隣さんの目にいかにも豪奢に光り輝いて見えたので、一万一千の聖處女(44)の中から一人心の君を選べといふお恵みに与(あず)カつたとしても、彼は聖女たちを一人残らず通過させて魅惑のメータを選んだことであろう。

しかし青年が罪の無い企みの成功をひそかに喜んでいた折も折、内緒(45)とがばれてしまった。ブリギッタ母さんは、自分にたっぷり儲けさせてくれた例の亞麻売り買いの仲立ち女にお札をしたいと思い、たっぷり砂糖を入れた米のお粥(6)と壇四半分のイスパニア産発泡葡萄酒でもてなしたもの。こうした甘い物は老婆の歯の無い口を動かしたばかりでなく、おしゃべりの舌をも活動させ、彼女は、自分の依頼主が今後もそうする気があるなら、亞麻取引きを継続する、と約束した。ええ、ええ、あの男は親切でやつてくれたんだ、とあたしや思いますね、と。言葉が他の言葉を呼ぶ。母なるエーファの娘〔女性〕たちはその性に付きものの好奇心であれこれと詮索、とうとうご婦人のだんまりというやつの脆い封蠟を溶かしてのけたわけ。メータはこの打ち明け話にびっくりして蒼白になる。母親が事に

関わっていなければ、眞実を聞かされてうつとりしたことだろうが、淑やかさと品位というものについての母親の厳しい見解をよくよく心得ていたので、そのせいで新しいローブが失くなってしまう、と心配になつたのである。しかし者の中には娘に劣らずこの話を聞いてうろたえたが、彼女としても同様、今回の亞麻取引きの本来の性質については自分独りが知つていたかった、と考えた。なにしろ、このご近所の厚意は娘の心にかねてからの自分の計画をぐらつかせる印象をあたえるのでは、と心配になつたので。そこで母親は決心した。乙女心に芽生えたこの雑草がまだかよわいうちに現行犯で根絶やしにしてしまおう、と。まずローブは可愛い持ち主の哀訴嘆願にもかかわらず没収、交易市場に出されてこれがお金になると、極めて良心的に計算された例の亞麻売買の残りの収益と一緒に包みにされる。それから古い債務として、ハンブルクの飛脚問屋の手を介し、ブレーメン在住、フランツ・メルヒヤーゾーン殿宛て返却完了。受け取つた方は何の疑いも無くこの包み金を思いがけない天のお恵みだと歓迎、父の債務者が全てこの未知の正直者のように良心的に負債の残りを支払つてくれたらなあ、と考え、事の本当の繋がりについてはこれっぽっちも感づかなかつた。仲買の女は自分のおしゃべりがばれないようよくよく注意し、ブリギッタ母さんが亞麻の取引きを止めた、と彼に言うだけで満足したので。

とは申すものの、お向かいさんの様相が一夜にしてがらりと変わつたことを鏡が彼に教えた。草花の鉢の数数が一つ残らず消え失せ、窓掛けの面紗の雲が上天気だった彼方の窓の水平線をまたしても覆つている。メータの姿が見えることは稀で、白銀の月が荒れ模様の夜雲間から現れるように一瞬顔を出すことがあっても、ひどく悲しげな表情だつた。双眸の輝きはどこへやらだし、時折真珠の涙を指で押し拭つてゐるよう見えたことも。これはひどくフランスの心を動搖させたので、ラウテは柔媚なりュディア調で憂愁に満ちた共感を鳴り響かせた。フランツは苦惱し、いとしい女の悲哀の原因を究明しようと考へあぐんだが、彼の思案では何の決着もつかずじまいだつた。幾日かが経つ

と彼は、自分の一番大事な家具である例の大きな鏡が全く無用の長物になつたのに気づいて慌てふためいた。ある晴れた朝いつもの隠れ場所に座を占めて眺めると、お向かいの雲なす窓掛けが全部夜霧のように消えて無くなつてゐるのである。初めは、今日は掛け布やら何やら大物の洗濯日のせいと思ったのだが、すぐに彼は部屋の中ががらんと空っぽなのを目についた。好ましいお隣さんは前の晩にこつそり陣地を撤去、宿营地を移していたのである。

さて、自分が外を眺めているのにだれかが気を悪くしやしないかと心配せずに、こうしてまた心行くまでのんびりと自由な展望を楽しむことができるようになつたのではあるが、青年にとつてプラトン的恋の対象の快い姿を見ずには済ませなくてはならないのは辛い損失だつた。愛しの妻エウリディケの魂魄(43)が再び黄泉の国オルクスにふわふわ消え失せてしまつた時、フランスの芸道のお仲間である音曲に優れたオルフェウスがそうなつたように、そしてかの逸脱の十年に荒れ狂つた我らがますらおたちの瘋癲病質(44)も、やがて時期が到来すると、最初の霜に遭つた丸花蜂ながら、いざこへともなく消え失せてしまつた時のように、フランスは黙りこくつてぼうつと突つ立つたまでいた。榮耀榮華の暮らしをしていた頃だつたら、この無風状態、突然の颶風に移行したことであろう。少なくとも彼は髪の毛をかきむしり、地面を転がり回り、あるいはまた、駆け寄つて壁に頭を叩きつけ、暖炉と窓をぶち壊すなど、狂人として振舞つたことだろう。こうしたことは何も起こらなかつた。至極明白な理由からである。なにしろ、眞の恋といふものは決して愚者を作らないのであって、病んだ情緒を癒し、愚行から守り、逸脱に柔らかな枷(45)を掛け、若氣の無思慮を破滅に繋がる道から理性の行程へと導いてくれる万能薬だからだ。なにせ恋が正道に戻してくれぬ放蕩者はてんから救いようの無い代物なのである。

気持ちがまた落ち着くと、彼はお隣さんの水平線に生じた思いがけない諸現象について様様の有益な観察を行なつた。彼は勿論、この狭い小路に運動を誘発、女人族殖民地の移転を惹起した梃子は自分だ、と推測した。受け取つた

金子、停止された亞麻取引き、そしてこれらに統く引越し、この三つをお互いに掛け合わせると、何もかも説明のつく罪となる。分かったのは、どうやらブリギッタ母さんが自分の隠し事を嗅ぎつけたということ、それから、あらゆる状況からして自分が彼女の意中の男ではないということ。この発見、フランツ君の展望をあんまり明るくしたわけではない。一方、麗しのメータの象徴的な返辞、つまり草花の鉢を使って彼の音楽での求愛に応えたあれ、彼女の悲嘆、そして自分が狭い小路からの屋移りのちょっと前綺麗な彼女の両眼に見た涙、こういった数々は彼の見込みを活気づけ、朗らかな気分にさせた。彼が最初に取り掛かったのは、お客様さんたちのところへ出かけて行つて、ブリギッタ母さんが御座所をどこに移したかを知ること。そうして心優しいその娘となんとかしてひそかに繋ぎをつけよう、というわけ。彼女たちの滞在先を突き止めるのは大して骨は折れなかつた。けれどもフランツはごく控えめに行動、ブリギッタ母さんの自宅には行かず、母娘がミサを聴聞する教会を探り出し、いとしい乙女の姿を毎日一度眺めるという楽しみを味わうだけで満足した。教会からの帰り道に行き逢つたり、折折そこそここの店やら、あるいはまた彼女たちが通らなければならぬ建物の出入り口とかで彼女を待ち受け、にこやかに会釈したりする機会は絶対に逃さぬ。こういったことは恋の玉章と全く同じ値打ちがあるし、効果もこれに匹敵する。

メータの受けた躰しづけがあれほど修道院的でなく、また、貪欲な目から財宝を守るように厳格な母親に箱入りにされていなければ、隣人フランツのひそやかな求愛は疑いも無く大した印象をあたえなかつたことだらう。しかし彼女は母なる自然とブリギッタ母さんとが教育問題で常に衝突する危ない年頃になつていていたのである。前者、すなわち母なる自然是、隠れた本能を通じて五感と馴染みになることを教え、これらを名前は付けなかつたが人生の万能薬として推奨した。後者、すなわちブリギッタ母さんはある情熱の襲来を警告、この情熱の本当の名前を彼女は口にしたがらなかつたが、とにかく、その言い草によれば、うら若い乙女にとつて疱瘡ほうとうの毒よりもみつともない、めちゃめちゃな

結果をもたらす、とのこと。前者が、この世の花盛りの春なのだから季節相応、メータの胸を快い温かみで高揚させれば、後者は、この胸が氷室同様いつまでも凍てつくように冷たいまでいることを願う。よくできた二人の母親のこうした正反対の教育体系のせいで、娘心は、間切つているうち風(アモリ)にも舵にも従わなくなつた船のよう、至極当然なことながら第三の針路を取るに至つた。彼女はいとけない頃から教育によつて刻み込まれた淑やかさと美德を堅く守り続けたが、その心はあらゆる優しい情念に敏感だつた。そしてこのまどろんでいた五感を自覚めさせた始めての青年がお隣さんのフランスなので、彼にある種の快さを感じるようになつたのである。この気持ちを彼女はほとんどそれと意識していなかつたが、もつと初心でない女の子だつたらだれでも、これつて恋なんだ、と言い切つたことだらう。だからこそあの狭い小路との訣別は彼女にはとても悲しかつたのだし、だからこそ、彼女の綺麗な目から一滴の涙が零れ落ちたのだし、だからこそ、待ち受けていたフランスが教会からの道で会釈した時、彼女の方も親しげに礼を返して、その際耳まで紅くなつたのだつた。相思相愛の二人はなるほどお互一言も口に出しはしなかつたが、彼には彼女の考えが、彼女には彼の想いが完璧に分かつたので、二人つきりで逢引をしたとしてもこれほどはつきりと思ひのだけを吐露することはできなかつたろう。そしてお互い同士、それぞれこつそり心の中で、沈黙の封印のもと、相手に変わらぬ気持ちを誓つたのである。

ブリギッタ母さんが借家住まいをした街区には勿論ご近所がいたし、その中には娘っ子に鵜の目鷹の目という連中もいた。こういう輩(アホ)に魅惑のメータの麗しさがいつまでも気づかれないのでないわけはない。丁度彼女らの住まいの真向かいに一人の裕福な麦酒醸造家(ビル)が暮らしていた。なにせどつさりお金があるので、ふざけ屋たちにホップの王様と綽名されていた。この男、まだ若い敏捷な鰐夫(ヤマメ)で、折から費が明けたばかり。これで社会儀礼にもとることなく、また家庭の面倒を見ててくれる別の伴侶を物色する資格が備わつた次第。彼は今は亡き妻(ムカシ)が身籠るとすぐ、もし一度目の結婚



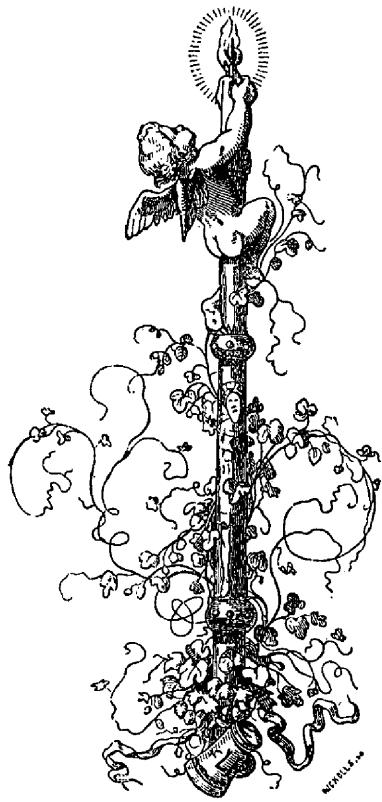
が自分の思い通りにうまく行けば、ホップの支柱のように長く、麦酒の攪拌棒のように太い蠟燭を捧げまする、とごく内密に守護聖人の聖クリストフォルスにお祈りしたのである。彼はほつそりとなよやかなメータを目に見るやいなや、聖クリストフォルスが三階の窓から中を覗き込んで（7）、債務を履行せよ、と督促している夢を見た。すばしこい鰐夫にとつてこれは、遅滞無く網を打て、という天命だ、と思われた。朝早くこの市の仲買人たちを呼び集めて、漂白した蠟の購入を依頼、これが済むと市参事会員のようにめかしこみ、結婚案件を推し進めに掛かる。この御仁、音曲の才は持たぬ。恋の神秘な象徴性にもとんと通じない無骨者。けれども繁栄している麦酒醸造所を親から受け継いでいたし、市の金庫には現生を、ヴエーザー河には一隻の船を、郊外には莊園を一つ持つていた。こういつた後ろ盾がある訳だから、聖クリストフォルスが肩入れしてくれなくたつて求婚は望み通り成功する、と信じられた。とりわけ持参金の無い花嫁なんだし。

彼は昔からのしきたりに従い单刀直入に運試しに出かけ、ご近所のよしみでおつかさんに、淑德高く行い正しいその息女に対する彼のキリスト教徒らしい意図を開陳した。天使が顕現したつてこの嬉しい知らせほどこの善良な女性をびっくりさせることはできなかつたろう。自分の聰明な計画が実を結び、これまでの窮乏状態からもとの裕福な暮らしに戻りたいとの希望が成就するのを目の当たりにし

た彼女は、あの裏町を引き払つた思いつきの良さを祝福、最初歓びが沸き立つて、何千もの陽気な考えが心の中で行列を作つた時、このきっかけをあたえてくれたお隣さんのフランスのこととも思い出した。彼は全然お気に入りではなかつたが、それでも彼女は昇りつつある自分の幸運の星の偶然の道具となつてくれた彼に、何か贈り物をしてこつそり喜ばせてやろう、同時にそれによつて厚意から出た亞麻取引きの一件の損害賠償をしてあげよう、と誓つた次第である。

おつかさんの胸のうちでは婚礼の予備交渉は調印されたも同然だつたが、こういう重要な問題でそそくさと事を進めるのは社会儀礼が許さぬ。そこで彼女は政府二請訓アド・レフュードウムとしてこの申し込みを受諾、お祈りをする時にこの事を娘と入念に考えよつ、と一週間の猶予を求めた。それが過ぎたら、と彼女は言つた、ご立派な求婚者のあなた様に色好いご返事でご満足戴けようか、と存じます、と。こちらは通常の手続きとして喜んでこれを承認、暇を告げたのである。彼が背を向けた途端、紡錘と糸繰り車、麻打ち棒と麻櫛の面面は、忠実なご奉公をしたのにそれには何の斟酌も無く、時折パリの議員諸公の身に起るるように衰れや追放の憂き目に遭い、無用な道具類としてがらくた部屋に放り込まれた。ミサ聴聞から戻つたメータは居間の突然の大変動にびっくり仰天した。居間は一年の三大祝祭のどれかのように悉皆しづかひかぴかに磨き上げられていたのである。彼女は、働き者の母親が仕事日なのに勤勉な手を無為に膝に置いていられるのがどうしてだかさつぱり分からなかつた。しかしそうやってにこに微笑んでいる母親にこの家の模様替えについて問い合わせるも無いうちに、相手はもう謎の説明を開始した。舌先にむずむずとたゆたつていた長広舌がご婦人の雄弁の奔流となつて口から迸ほとばしり、先に控えた幸せを彼女の想像力がますます膨れ上がらせて止まぬこの上もなく活き活きとした色彩で描き上げた。で、てつきり純潔なメータが乙女らしいはにかみからそつと顔を赤らめ——これは愛の修練期に入ったことを告げるもの——それがら、何もかもお母様にお任せしますわ、と応えるもの

とばかり思つたのである。だつて婚儀に関しては昔の娘たちは現代の王侯の姫君たちと同じ、好きかどうかなんて訊かれやしない、合法的な配偶者の選択に際して、祭壇を前にしての応諾の一言以外、声なんぞ出せはしなかつたのだもの。



けれどもブリギッタ母さんはこの点ですっかり当てが外れた。麗しのメータはこの予期せぬ通牒に接すると、薔薇のようにならず、死骸のように蒼白になった。ヒステリ一性の眩暈^(めまい)が五感を混迷させ、彼女は失神して母の腕の中にくずおれた。冷たい水で動物精氣^(じき)が元通りになり、いくらか立ち直ると、メータはまるで大きな災厄に遭遇したかのようにどつと涙を流した。そこでわきまえのあるおつ母さんは、結婚なんててんから頭になかったので娘がひどく驚いたのだ、と考え、頑固に強情を張つて、良縁で幸せをつかむ機会をみすみす逃がしちゃいけない、と懇懃と諭したり戒めたりした。しかしメータは、自分の幸せがだれかのと結婚次第だ、と説き伏せられず、得心できません、と言うのだった。母親と娘との論争は数日間朝早くから夜遅くまで続き、回答期日が迫つて來た。聖クリストフォルスに捧げる巨大な蠟燭は、それが婚礼の炬火として陣営の彼の御前^(ごぜん)で輝いたとしたら、バシャンの王オグ^(おぐ)にだつて恥ずかしからぬ代物で、もうとうから出来上がり、活き活きとした數数の花が描かれ、彩り豊かな灯火のようだつた。もつとも、聖者

様の方はこの間ずっと自分の被保護者にすっかり無精を決め込んでいらしたので、麗しのメータの心は求婚者に對し門かんも錠も下るされたまんま。

母親の説得術の効き目は強烈だったので、娘はうつとうしい夏の暑さに萎れる花さながらぐんにやりとなり、目に見えて衰弱。ひそやかな苦惱に心を苛まれるまま、彼女は厳しい断食を自らに課し、三日というもの一囗も食べ物を摂らず、一滴の水も乾いた唇を濡らさぬという有様。夜毎眠りが彼女の目を訪れるることは無く、そういうするうち瀕死の病となり、終油礼(5)を施して欲しい、と懇願するに至った。心優しい母親は行く末の希望の支柱がぐらつきだしたのを見て取つたので、元金(もじん)と利息をいつべんに揃つてしまいかねない、と考え、よくよく思案したあげく、両方ともふいにするよりは後の方を棄てるのが得策なことに思い当たり、にこやかに讓歩して娘の言いなりになることを承知した。こんなに有利な縁組をはねつけるには確かに大層な自制もし、少なからず心中に葛藤もあつたのだが、家庭管理の法則が当然それを必要としたわけだし、最後には愛しい子の意思に完全に屈服し、従つて病人をそれ以上責め立てるとは無かつた。約束の日に敏捷な鰯夫が、自分の天界の代理人が万事望み通りうまく運んでくれたもの、と信頼しきつて到来すると、全く予想に反して謝絶の回答に接したのである。しかしながらこの返事、思いやりの気持ちでたっぷり和らげられていたので、聞かされた当人は砂糖入りの苦艾酒(ケルモット)(5)を飲ませたような気分。彼はたやすく運命に甘んじ、麦芽(モルト)の取引きがだめになつたくらいにしかこのことを気に掛けなかつた。そもそもこれでくよくよしなければならない理由なんかも無かつた。なにしろ彼の生まれ故郷のこの市は、ソロモンの素描に匹敵し、完璧な妻になる資格のある愛らしい娘たちに決して事欠かなかつたのだから。その上、今回の求婚が失敗したにもかかわらず彼が固く信頼し続けていた守護聖者様が、別のところで世話を焼いてくださつたので、一箇月経たないうちに彼はいとも華やかに聖人の祭壇の前に約束の蠟燭を押し立てたのである。



ブリギッタ母さんは仕方なく、追放されていた糸紡ぎの道具類をがらくた部屋から召還し、また活動させ始めた。何もかも普段の暮らしに戻ったわけ。メータはすぐに元通り元気回復、せつせと仕事に励み、熱心にミサに出かける。

一方おつかさんは希望が潰えたのと大事に暖めていた計画が水の泡となつたのに対する心底の恨みつらみを隠すことができず、小言が多く、仏頂面で、しょぼくれている。とりわけこの近所のホップの王様が祝言を挙げた日には不機嫌に責め苛まる。婚礼の行列がいよいよ教会に入る折、都市音楽師たち(音)がその先触れに喇叭(ラウズ)を響かせ、シャルマイ(チャーミー)を吹き鳴らすと、荒れ狂う海が彼女の夫を船と船貨もろとも呑み込んだ、とのヨブの報(トビ)せがもたらされたあの悲運の時のようにしくしく泣いて嘆息しきり。メータは絢爛豪華な花嫁衣裳をまことに冷ややかに見過ごす。壯麗な装身具、銀梅花(シルバーチューリップ)の花冠に鏤(カバ)められた宝石の数々、花嫁の頸の周りに廻らされた九連の真珠の首飾りを見ても泰然自若。これは驚嘆すべきことであった。なしに新らしいパリ製の縁無し帽(ボンネット)とかといつた

当節流行の安びか物が彗星のよう輝くと、教会の会衆がたの平安と和やかな至福の念が搔き乱されることあまたたびなのだから。ただ母親の胸をきりきり苛む苦惱だけが彼女の心を乱し、彼女の晴やかな眼差しを曇らせる。数限りなく優しい言葉を掛け、細やかな配慮をしてあげて、母親の機嫌を取ろうと努めてみたが、やつとのことおつかさんがまたちよいとおしゃべりをするようになつただけ。

その宵、婚礼祝いの輪舞が始まると、おつかさんはこう言つた。「ねえ、おまえ、おまえがあんなに愉しそうな踊の音頭(カンダ)を取ることができたのならねえ。なんて嬉しいことだつたろう。母様の苦労と気遣いにこんな喜びでお返

しをしてくれてたら。でもおまえはせっかくの運をつっぱねてしまったのだから、わたしやおまえをお祭壇に連れて行くことなんぞ生涯できやしない」。「お母様」とメータ。「私、神様を信じています。お祭壇に連れて行かれることになるつて、天にそう記されているのなら、お母様、私にご婚礼の花冠をつけてくださいましね。だつて本当の求婚者が見えたたら、私の心はすぐに、ええ、と申しますもの」。「あのね、おまえ、持参金の無い娘たちの周りに人だかりはできませんよ。そういう娘たちは、その気になつてくれる人で我慢しなくつちや。若い男の人たちは昨今ではとつても選り好みがうるさくて、自分が幸せになるために求婚するんで、相手を幸せにしてあげるために求婚するんじやありません。それにね、おまえの星回りはたくさん良いことばっかり予言してるわけじゃないのよ。おまえは四月生まれ。ごらん、暦になんて書いてある。この月生まれの女の子は、顔は優雅で感じが良く、体はほつそりなよやか、でも気分が変わり易く、男たちに好みがある。結婚にはよくよく注意のこと。朗らかな求婚者が現れたら、運を取り逃がさぬよう、だつてさ。これ、ぴつたり当たつてているじやない。求婚者は現れたけど、二度と戻つて来ない。おまえは逃がしちやつたんだわ」。「ああ、お母様、星回りの占いなんて気になさらないので。私の心はこう言っています。私は、私を是非とも妻にしたい、と願う殿方を敬い愛することになつていて、つて。そういう方が私に見つからず、あるいはそういう方が私を探さないなら、私、楽しく自分の手で働いてご飯を食べ、お母様のお手伝いをし、お歳になつたら、ちゃんとした娘に相応しくお母様のお世話をします。でも私の心の殿方が現れたら、あなたの娘がこの世界に幸くなるよう、私の選択を祝福してくださいね。そして、その方の身分は高いか、とか、お金持ちか、とか、尊敬されているか、とかいう訊きかたはしないで、善良で誠実な人が、私を愛しているか、それから、私に愛されているか、つて訊いてくださいな」。「おやおや、娘や、恋愛結婚するとお台所は惨めなもの、お塩とパンで食い繋ぐのが精精よ」。「それでもそういう結婚なら仲良く満足して暮らせます。それにね、生活の楽しい味わいがお塩とパンに風

味を添えてくれるわ」。

塩とパンという内容豊富な題材は、婚礼の宴会場で提琴^{ヴァイオリン}が一つまだ鳴っている間、夜遅くまで討論された。美しくてうら若いのに、玉の輿に乗るのをはねつけたところから見ると、ごく限られた幸せしか望まないようと思われる慎ましやかなメータの欲の無さから、母親は、この塩取引きをやろうという計画がどうやら以前からもう娘の乙女心に芽生えたらしい、と類推した。例の狭い小路での取引き仲間を当てるのも簡単だつた。みんなのが愛らしいメタの心に根を張る樹になろうとは、彼女は皆信じたことが無かつた。近くにある可愛い灌木と見れば、手当たり次第それに巻きつこうとする野放しの蔓草としか思わなかつたのである。この発見はあまり嬉しくない。もつとも、気づいたなんて彼女はおくびにも出さなかつた。でも彼女の厳しい倫理に従えば、聖職者に祝福を受ける前に心に愛を巣食わせた乙女は虫食い林檎^{りんご}のようなもの。そんなのは見た目には悪くないだろうけど、食べるのには向きやしない。どつかの箱かなんかの上にほっぱらかされて、もう見向きもされないんだわ。だって嫌らしい虫が芯を食べ続けて、そこから引っ張り出せないのでもの。ブリギッタ母さんは、生まれ故郷のこの市でいつかまた上へ浮かび上がることにすっかり気後れがしてしまい、宿命に身を任せ、もう変えられっこない、と思い込んだ状況を黙つて耐え忍んだ。一方、氣位の高いメータが金持ちのホップの王様に肘鉄砲を喰らわせた、という噂が市中を駆け巡り、狭い小路にまで届いた。フランスは、この風評が本当だと聞き知ると、喜びに我を忘れた。そして、資産のある競争相手が自分を愛しの乙女の胸から追い出すかもしれない、というひそかな心配はもう彼を悩まなくなつた。彼には自信があり、全市にとつて依然さっぱりわけの分からぬこの謎を簡単に説明することができた。さて、恋はこの放蕩者を確かに音楽^{ヴィルトオーケ}名人に仕立て上げた。が、しかし、こんな才能は当時の求婚者にとつては最低限の必要条件だったのであつて、あの荒っぽい時代には、この豊潤な十八世紀のように、尊敬されたり、飯の種になつたりしたわけではない。諸芸術^(註)

はまだ豊かな社会の申し子ではなく、欠如と窮乏の所産であり、騒がしい楽隊が金持ちの扉の前で、路銀をお恵みを、
とがんがんやらかすブラークの大学生ども以外、旅するヴィルトオーソなんて知られていなかつた。愛しい乙女のあ
あした献身は小夜曲(セレナーデ)一節のお礼としては大き過ぎたのである。今や無思慮な若気の至りを回想するたび、フランスの
心はずきずき痛んだ。己(おのれ)の愚行を嘆息する「おお」や「ああ」で始まる真心籠めた独り芝居を彼は何度演じたこと
だらう。「ああ、メータ」と彼は独り言を呟くのだつた。「なぜぼくは君のことをもつと前に知らなかつたのだろう。
君ならぼくの守護天使になつてくれだらうに。そしてぼくを破滅から救つてくれただらうに。ぼくが失われた日日をも
う一度やり直すことができれば、そして昔のぼくの身分であれば、この世はぼくにとつて至福の野(エリックム)になつてゐるだろ
うに。そしてぼくはこの世を君のためにエデンの園に変えてあげるだらうに。気高い乙女よ、君は慘めな男に、愛と、
それから、君が受けるに相応しい幸せをあげることができない、という絶望で一杯の心臓の他何一つ持つていらない乞
食に自分を犠牲として捧げてくれたのだ」。こうしたひりひりするような感情に襲われるたび、フランスは怒りに満
ちて何度も何度も自分の額を叩くのだった。「おお、この考え方無しめ。おお、この愚か者め。貴様、利口になるのが
遅すぎた」と深く後悔した叫びを挙げて。

恋は自らが創りだしたもの未完成のままにはしておかない。恋はフランスの心情に癒やしとなる物を発酵させた。
すなわち、ろくでもない現況から這い上がる活動と力を行使したい、との欲求である。恋は彼を、こうした良き意図
を実現して見たい、という気にさせた。めちゃくちやになつた財政状態を改善しよう、と彼が思い巡らした様様の思
案の中でうまく成功しそうに思われた最もまともなやつはこうだつた。父親の帳簿を吟味して、欠損として記帳され
た貸倒れ売掛け金を書き留め、国をあちこち渡り歩いて一種の落穂拾いをやり、こういう捨てられた茎から一マース
ほどの小麦が集められないかやってみよう、というもの。こうした収益を彼はささやかな商売を始めるのに投資する



つもりだつた。彼の想像力はこの商売をすぐさま世界各地に拡大した。彼にはもう自分の財産を積載した何艘もの船舶が海を走っているのが目に見えるような気がした。かれは急いで計画の実行に着手、遺産の中から最後の黄金の擬似卵(ぎじうん)、つまり父の遺品の刻打ち卵(とき)（卵型懷中時計）を金に換え、その金で、ブレーメンの商人と名乗つて広い世間に騎り出そうと、一頭の老耄(おぼ)れ乗用馬(あぶな)を購つた。

彼にとつて辛いのは麗しのメータとの別れだけ。「ぼくがもう教会の行き帰りに遇わなくなつちやつたら」と独り言。「彼女はどう思うだろう、こんなに突然ぼくが姿を消したのを。ぼくが心を変えたと思って、ぼくのことを心の中から追つ払うんじゃないかな」。こう思うと殊の外心配でならなくなつたが、どうすれば自分が何を考えたか彼女に知つてもらえるか、長いこと良い思案が出ない。でも、恋は創意に富んでいるから、衆人環視の説教壇から自分が不在になること、その目的はこうこうであることを彼女に告知させる、といううまい思いつきに恵まれた。彼は、これまでも相思相愛の二人がこつそり心を通わせるのに役立つた教会で、事業をきちんと立て直すために永の旅路に出るさる年若な旅人のため、として代理祈禱(あい)が行われるよう金を払つた。この代理祈禱は彼が報謝金を喜捨するまでずっと続けてもらうことになつていた。

メータと最後に行き逢つた時、フランツはすっかり旅装束に身を固めており、可愛い女のごく近くをさつと通り過ぎながら意味ありげに彼女に会釈した。メータがそれに対して顔を赤らめ、ブリギッタ母さんが傍らでとやかく批評して、この無考えな洒落男(しゃれ男)の凶凶しいことつたら、娘の悪い噂の種になるじゃないか、と不機嫌を表明し、長のそ

日一日極めてありがたいとは言えぬやりかたで娘にそれを言い立てる機会を逃さなかつたのに対し、いつもより注意を払わざじまいだつた。その時以来フランスの姿はもはやブレーメンに見られなくなり、彼の生まれ故郷のこの市切つての美しい双眸が捜し求めたが徒勞だつた。メータはしばしば代理祈禱が読み上げられるのを耳にしたが、ついぞ氣にもしなかつた。というのも、恋人が杳として姿を消したのが心配で心配でならなかつたからである。こうした雲隠れの理由が彼女にはとんと見当がつかず、どう考えたものかもうそつぱり。数箇月が経過して、時が彼女のひそやかな怒りをいくらか和らげ、彼女の心情が彼の不在をいくらか安らかに我慢できるようになつた頃、いとしの君の最後の面影が念頭に搖曳^(よよき)していた折も折、例の代理祈禱が突然奇妙に思えてならなくなつた。彼女は事の脈絡^(みあせ)とこの告知の意図がどういう関係にあるか辯^(べ)證^(せい)を合わせ、推量したのである。教会の祈願、祈禱、代理祈禱などが靈驗^(れいげん)いやちこであるという定評は無いし、教区の会衆に燃え上がる敬神の炎はお説教が終わるとともに消えてしまふのが普通なので、こういつたものに縋る敬虔な人人にとつて弱弱しい杖に過ぎないのだが、信心深いメータの場合、代理祈禱が唱えられるとその炎がますます煽られ、若き旅人の守護天使に、あのかたをくれぐれもお守りください、と祈り続けて止まなかつた。

原注

- (1) ご老体の息子万歳 「伝承によれば、今日なおいくつかの地方で用いられているおどけた挨拶「命永かれ」老体の息子殿 Des Alten Sohn soll leben」は、この故事に由来する、と言ふ。
- (2) 世間の思惑 qu'en dirait-on? フランス語。「世間はそれに対して何と言うだろう」。
- (3) あの賢い女性愛好家ソロモンが……素描 「ソロモンの箴言」三十一章十一節～最後。
- (4) シュッディング Schudding. ブレーメンの最もりづばな建物の一つ。いのでは大商人たちの集会がおこなわれる。
- (5) ἄπο τῷ ὄρεῳ ἐπέκειται τὸ ἔρεν. ギリシャ語。「恋は眼^(アイ)よりす」。

(6) たっぷり砂糖を入れた米のお粥 コーヒーがまだ知られない時代、しかるべき身分の婦人方は女性の訪問客を糖菓^{トフエイシ}あるいは焼き菓子のたぐいと甘い葡萄酒でもてなすのが普通だった。もつと造り繰り上手な主婦だとその代わりに米のお粥と一杯の地酒を用いた。前者「米のお粥」はことのほか美味しい物として高く評価され、王侯の饗宴に出された。今に保存されている昔日の食卓の古文書が語るところによれば、米のお粥無しでは選帝侯のお床入りの儀は執り行われなかつたそうな。

(7) 聖クリストフォルスが三階の窓から中を覗き込んで、聖クリストフォルスは他の聖人たちと異なり、後光に包まれて小さな寂しい部屋の被保護者^(ひ)の前に姿を現すということは決して無い。どんな部屋でも彼の巨人のような体格では天井が低すぎるるのである。そこでこの聖なるアナクの子孫^(大男)は被保護者たちと窓の外からしか話し合わない。

(8) 刻打ち卵 Stundeneier. 最古の懷中時計はその最初の形から、「刻打ち卵」と呼ばれた。

破の巻 粗筋

旅に出たフランツは、宿泊する旅人をぶんなくなる、との悪評がある騎士の城で鷹揚な振舞いに終始したので、騎士に気に入られ、至れり尽くせりのもなしを受ける。アントウェルペンに到着したが、この市で父の債務者たちに陥れられ、貸倒れ売掛け金を回収するどころか、債務者拘留所に収監され、馬さえ取られて、素寒貧^{すかんびん}の身で放逐される。とほどほどネーデルラント〔現代のオランダ・ベルギー一帯〕との国境まで戻つて来た彼は、幽靈が出没する、といふ古城に泊まり、理髪師の幽靈に頭髪、眉、鬚、全てを剃られるが、お返しに理髪師もそのように剃つてやり、三百年来この城に憑依しなければならなかつた呪いから相手を救済してやる。理髪師の幽靈はお礼にこんな助言をする。鬚と髪が元通りになるまでここに滞在し、それからブレーメンに戻れ。そしてヴェーザー河の橋の上で秋分の日に一人の友を待ち受けよ。その友人は、そなたが豊かになるにはどうすればよいか、教えてくれよう、と。一方、古城の持ち主の伯爵は、幽靈を祓つてもらつた礼に、とフランツに装備の整つた馬一頭とたっぷりの路銀をくれる。そこで彼は無事にブレーメンに帰着、メータが健在で未婚であることを聞き知り、満足する。

急の巻 粗筋

秋分の日、フランツは早朝から一日中ヴェーザー河の橋の上で友人とやらを待ち続ける。夕暮となつてその日が終わるとしても友は来ない。絶望して橋上を去ろうとした時、昼間金を惠んでやつた義足の退役**傭兵**^{ラバーハビット}がこの青年の举动を不審に思つて近づいて来る。そして訳を聽かされる。こうこうこういう夢を見たので、と語る青年に、廃兵も自分の忘れられない夢の体験を告げる。ブレーメンのこれこれこの場所に財宝が埋まつてゐる、と詳細に天使が教えてくれた、という夢である。しかし、この退役兵はそんな夢は信じないので、宝探しもしていない。フランツはその場所、目印を聞いて驚愕する。亡き父^{ゆかり}の庭園なのである。早速教えられた通りに宝「亡父が生前埋めて置いたもの」探しを実行して成功。元の富裕な身に返り咲いたフランツは麗しのメータと結婚、橋の上以来の友人である廃兵には充分なお札をいたしましたとさ。

訳者から一言。

原作は全一篇で分かれてはおりません。けれども物語の構成上うまく三つに分割できますので、展開に応じた名称「序・破・急」を冠し、三部に仕立てました。「序の巻」で全体の四割弱。これが一番長いのです。「破の巻」(三割強)と「急の巻」(二割強)は続けて訳出いたします。「急の巻」の訳が仕上がりましたら、比較□承文芸論の立場からこの物語全体に亘る解題を添えるつもりです。

訳註

(1) ブレーメン Bremen. 由ハノザ都市 Freie Hansestadt^o 現在北部ドイツの大都市でドイツ連邦共和国最小の州。北海に注ぐヴェーザー河下流の両側に位置する。「ただし、海港は更に下流、北海沿岸のブレーマーハーフェン Bremerhaven」。流れの左側には新市街が、右側には旧市街と市の中心部がある。初めてこの名が現れるのは七八二年。一三五八年以降ハンザ同盟都市となり、一四〇〇年頃経済的繁栄を迎える。一五一一年宗教改革がこの町にも導入され、幾たびもの苛烈な信仰闘争を経てから穩健なカルヴァン派信奉に落ち着いた。これが何世紀にも亘ってこの町の文化を特徴づけることとなる。一六〇〇年頃、ネーテルラント〔現代のオランダ・ベルギー一帯〕に強く依存しながら、建築上でも経済上でも頂点に達する。一六一三一一七年軍事上の理由からヴェーザー河左岸に新市街ができた。この物語の時代背景は、ヴェーザー河に架かる交通頻繁な橋が舞台装置の一つになるので、この時期に設定されているか、とも思えるが、内容的には更に百有余年以前と考える方がよさそうである。一四九一年に行われたフランスのシャルル八世とブルターニュ公國のアンヌとの結婚後僅か時日が経過したことに言及されている〔破の巻〕参照) ので。

(2) 新約聖書の例の金持ちの男 もし完全に永遠の命を得たいなら、持ち物を全部売り払い、貧しい人びとに施せ、ヒエスに諭され、それができないので、悲しみながら去つた、とされる男。マタイ伝福音書十九章十六一一二十一節、マルコ伝福音書十章十七一三十一節、ルカ伝福音書十八章十八一三十節。

(3) ターラー銀貨 十六世紀から十八世紀まで通用したドイツ銀貨。最初ボヘミアの銀鉱サンクト・ヨアヒムスツール〔聖ヨアヒム谷〕で良質の銀を材料として鋳造されたのでこの名がある。残念ながらこの物語の時代にはまだ存在しなかつたはず。

(4) 牡牛祭 「修道院の牡牛練り歩き」 Klosterrosenzug のことと思われる。宗教改革後聖ヨハネ修道院に一五三一年病院が設置された。一五一年病院はその収入の一部を古典語中高等学校に譲渡しなければならなくなつた。一六三〇年市参事会は市内で修道院のための募金をすることを認可した。のことから フライマルクト Freimarkt [これは元來「歳の市」。春と秋に開かれ、あらゆる種類の品物があらゆる種類の人人に自由自在に売られた。かくしてフライマルクトは民衆の祭となつて、月末にいつも行われている] の期間に、リボンや花冠で飾り、角には金箔を貼った二頭の肥えた牡牛を市中引き回し、数日後籠引き〔籠を賣うには金が必要なわけで、こうして得られた収益金からしかるべき出費を除いた金額が公共の用途に使われる〕で払い下げる という習慣が生じたとのこと。〔して見ると、ムゼーウスはこの物語の時代設定を十七世紀としているわけか。しかし、この物語ではまだ宗教改革が行われていないので、遅くとも十六世紀初頭、妥当なところ十五世紀と考えたい。従つて、この「牡牛祭」云々はターラー銀貨同様ムゼーウスの單なる時代錯誤である〕。最後のお練りは一八七一年、最後の籠引きは一八九六年に行われた。「修道院の牡牛練り歩き」の図は彫刻家カール・シュタインホイザー Karl Steinhäuser (一八一三一八七九) により古典的様式で大理石の壇に等された。これは一八五六年ヘルデン門 [現在は無い] の近くの壁壁 (市壁) 斜面に立てられた。

以上の説明のうち「」内以外の記事は「ブレーメン事典」Bremen Lexikonによる。

(5) 香味焼肉 中部ドイツ・テューリンゲン地方の名物料理。これはブレーメンの話だから、随分地域的に離れているが、テューリンゲン人のムゼウスが万事心得てのおふさけである。

(6) アメリカ大陸会議の公開信用状、あるいは合衆十三州全ての公開信用状 アメリカ独立戦争（一七七五—八三）で勝利を獲ち得、独立を達成して以来、新興のアメリカ合衆国およびこれを形成する十三州の経済の安定性と信用能力はきわめて上昇した。

強いられた独立戦争勃発に先立ち、本国イギリスの圧制に対抗するため、ニューハンプシャーからサウスカラライナに至る〔ジョージアを除く。ジョージアは一七七五年の第一回大陸会議から参加〕十二の大陸植民地の革命的な会議や委員会から選出された五十五名の代議員がフィラデルフィアに集まり、一七七四年九月四日第一回大陸会議が開かれた。これがやがて戦時国家の連邦政府に発展する。軍事費を捻出するため、大陸会議によって発行されたのが信用状 Bill of credit である。大陸会議発行の信用状は「大陸紙幣 Continental currency」とも呼ばれた。また State となつた十三の旧植民地も信用状を発行、これは「州紙幣 State bills」とも云ふ。戦時中大陸紙幣は大暴落するが、戦局の見通しが最も暗かつた一七八一年二月、大陸会議によって財政監督官に任命されたロバート・モリスは、フランス王国からの借入金金貨一十万ドルを活用して、北米銀行を創立、財政破綻を立て直す。

(7) 燃える蠟燭のもとで競元に掛けられ ジーロッパ中世においては、競元をする場合、あらかじめ蠟燭の所定の箇所に印を(ひけておき)、競りが進行してそこまで蠟燭が燃えたときの最終付け値で落とす、という習慣があった。

(8) ロビンソン・クルーソー風物語 (ロビンソンナーデ) 英国の作家ダニエル・ Defoe (一六五九—六〇—一七三一) の『mーク出身の海員ロビンソン・クルーソーの生涯と奇想天外な冒険』The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe of York, Mariner (一七一九)——、「わゆる『ロビンソン・クルーソーの冒険』」——に引き続き、無数の模倣、翻案が出版された〔ドイツ語への翻訳は既に一七一〇年に初訳が出た〕。ほとんどの國にもその地方にもそれぞれ固有の難破小説ができるのである。ドイツロビンソン物の児童文学として極めて成功を収めたのは、ヨアヒム・ハインリヒ・カハク Joachim Heinrich Campe (一七四六—一八〇八) の『ロビンソンの息子』Robinson der Jüngere (一七七九) であり、ロビンソンナーデのやわいの上なく着想に富み、文学的に極めて価値ある作品としてドイツ文学史で言及されるのは、ヨーハン・ゴットフリード・シュナーベル Johann Gottfried Schnabel (一六九一—一七五〇) の大作『幾人かの船乗りたち、よりわけギクセン人アルベルトウス・エリウスならびにフェルゼンブルク島に建設せられし彼のいくつかの植民地の奇妙な運命』Wunderliche Fata einiger Seefahrer, vornehmlich Alberti Juli, eines geborenen Sachsen, und seiner auf Insel Felsenburg zustande gebrachten Kolonien (一七二一—四一)——普通【フェルゼンブルク城】Die Insel Felsenburgとして知られる——である。本邦未訳だが、フランスのジョルジ・ガール Jules Verne (一八二八—一九〇〇五) の『神秘島』L'Île mystérieuse (一八七四—七五) は彼のロビンソン物中の傑作とすべきだ、とのいと。尤も、日本人が

邦訳のある、スイス人ヨーハン・ルドルフ・ヴィース Johann Rudolf Wyss (一七八二—一八三〇) の「*スイスのロビンソン*」Der schweizerische Robinson (一八一二—一七) は、牧教的でありかつ情緒面でも安定した読み物と思う。牧師夫妻と息子四人、合わせて六人のスイス人たちが、布教のためにイギリス領海外植民地へ向かう途中乗つた船が難破、家族だけで漂着した島に樂士を築く家族版ロビンソン物語。出版したヨーハン・ルドルフ・ヴィースはベルン大学の哲学教授であり、司書であり、民謡・民話の研究者だが、父で牧師だったヨーハン・ダーフィット・ヴィースにこの話を聞きながら育つた。そして、耳に残った物語や父の草稿やらをもとにしてこれを書き上げたものである。従つて原作者はヴィース父子二人ということになる。ほとんど全てのヨーロッパの言語に翻訳されたが、それとともに訳者たちの書き換え・書き足し・削除といったほいままでの編集を経て、多数の異稿が存在する。

- (9) 家庭小説 英国作家サ缪エル・リチャードソン Samuel Richardson (一六八九—一七六〇) の「パメラあるいは美德の報い」*Pamela, or Virtue Rewarded* (一七四〇) —— 独説は一七七一年 —— のもてな流儀に倣つた無数の模倣作が出てゐるが、これなどを指すかと思われる。

(10) 慢道物語 ハーベー・マルティン・ミラー Johann Martin Miller (一七五〇—一八一四) の感傷的なヨルテル風小説『ジークガルム』ある修道院物語 Siegwart. Eine Klostergeschichte (一七七六) —— これはマイソウや熱狂的に賛美された—— に而も続いて出たたへるの同種の作品のひとつである。

(11) プリンツ・ランプラスコ連 疾風怒濤運動の作家の一人フリードリッヒ・マクシミリアン・クリンガー Friedrich Maximilian Klinger (一七八一—一八二一) がシカゴウルム・ウント・ムランダの敵対者に粗野な風刺をほししまことにした作品に『天オナコノハナハナバコ』*Kriegerische Fliegende Blätter* und Doctor Martin Luthers (一七七〇) なるクロテスクな物語がある。ムゼーウスは彼を嫌悪した。

(12) カーケルラクある 『カーケルラク』あるとは、前世紀のある薔薇十字会員の物語 Kakerak oder die Geschichte eines Rosenkreuzers aus dem vorigen Jahrhundert (一七八四) は物語作家にして戯曲家だったハーベー・カール・ウェル Johann Karl Weel (一七四七—一八一九) が、一七八六年に精神病になる前に書いた最後の物語の一つ。ムゼーウスはヨーロッパのクロテスクな諷諭と明るかに唯物論的な傾向を不快に思つた。

(13) ローゼンタールの家族親戚一同 共通タイトル『マイツ人の新機軸小説集』Neue Original-Romane der Deutschen Schriftsteller (一七八四年) [「ハーベー・ローゼンタール、ある冒險譚」Edvard Rosenthal, eine abenteuerliche Geschichte を改題して出版された] 連の物語のことを仄めかしてさぬ。』の小説が好評だったので、更に『クーネル・ローゼンタール家の物語』Geschichte der Familie Rosenthal などが続いた。一八七六年までに至り十六巻が世に出た。

- (14) 騎士たちは……乗り回していた いわゆる騎士道小説はもう既に盛んだった、と云ふ。
- (15) ベルン [ヴュローナ] のディートリヒ Dietrich von Bern 東ゴート族のテオドリヒ大王 [五一六年没。ただし、ベルン=ヴュローナではなく、ラヴェンナ] をもととした南部ドイツの伝説の中心人物。弱冠にてもう巨人ジゲノートや勇者エッケと戦い、後にはヴォルムス近郊のローゼンガルテンでジークフリートをも相手にした。父の弟エルメンリヒ [史実ではオドアケル] のため彼はイタリアからハンガリーへ逃れなければならなくなつたが、かの地で部下 [その中にはディートリヒの忠臣] にはディートリヒの忠臣で彼が幼い頃からの武芸の師範である古豪ビルデブラントもいた] もろともエッフェル [ファン族の王アンティラ] に迎え入れられる。エッフェルの援助で武装を調えエルメンリヒに挑んだ戦いは一敗地にまみれるが、後に、新たに編成した軍隊でラヴェンナ市を攻略 王国を再び支配下に収めることに成功した。東ゴート王国の一部を占有したバイエルン人のもとで十二世紀以降ディートリヒを中心としてドイツ英雄伝説が集成された。ディートリヒ伝説はブルグンド=フランク系のジークフリード伝説にも組み込まれたので、彼は「ニーベルンゲン」の歌の第一部でエッフェルの宮廷の場に登場する。
- (16) ヒルデブラント Hildebrand 訳注¹⁵のディートリヒの忠臣。ドイツ最古の英雄叙事詩「ヒルデブラントの歌」Hildebrandslied の主人公。これは断片しか残っていない。息子ハドウブラントと余儀なく闘わねばならなくなつたヒルデブラントは、別の類詩によれば、自らの手で息子を殺す羽目に陥る。
- (17) 角あるザイフリート der gehörnte Siegfried 「角あるザイフリートの歌」Das Lied vom hurnen Siegfried はジークフリートの若い日の物語をメルビエン風に改作したもの。十六世紀初頭に登場。一七一六年に民衆本として散文で出版された。
- (18) 強者レンネヴァルト der starke Reinhardt あるキリスト教徒の姫君への愛に引かれてキリスト教に改宗した異教徒の巨人。中世高地ドイツ語の最も有名な叙事詩人ガオルフ・フォン・エッセンバッハによりその未完の韻文物語「ヴィヘルム」に取り入れられた。一一五〇年頃ウルリヒ・フォン・チュールハイムが続編「レンネヴァルト」を書いた。この人物像は極めて民衆的な伝説の登場形態の一つである。
- (19) ……征服していた 十五世紀以降広範にドイツ語圏に流布するようになつた「民衆本」には、伝説の主人公たちが、さまざまに形を変え、繰り返し登場した。そうしたことを探してくる。
- (20) 畏敬すべきトイアーダンク der ehrwürdige Theuerdank 歴史的寓意的騎士文学。その構想と主題はおむね「最後の騎士」と謂われた神圣ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世 (一四五九—五一九) をもととする。最初ニユルンベルクで一五二七年に出版されたこの詩は、騎士物語の体裁を取つて、生硬な韻文で狩りや戦いでの皇帝の冒險の数々を物語り、かつ、マクシミリアンがブルグントのマリア [一二三六三年から一四七七年まで存続、フランス王国と神圣ローマ帝国の間に位して勢力を拡大して行ったブルゴーニュ公國] でイン風に言えばブルグント公國——の最後の支配者シャルル^{チャルメル} (カール^{チャルメル}) の息女] に求婚した顛末を、おもむろの寓意的モチーフを鍵めた主人公トイアーダンクの嫁取りの旅に仕立て上げている。この書物は十六世紀と十七世紀に大いにてもはやされ、頻繁に改版・改作された。マクシミリアンとマ

リアの婚儀は一四七七年に行なわれ、舅がナンシーの戦いでスイス軍に敗れ、戦死したお蔭で皇帝はブルゴーニュ公領を手に入れた。しかし、マリアが一四八一年に逝去すると、これをフランス国王ルイ十一世に譲らざるをえなくなった。

(21) アントウェルペン Antwerpen 日本では英語読みのアントワーブが一般。フラン西語でアントウェルペン、ドイツ語でアントヴェルペン、

フランス語でアンヴェルス、またはアンヴェル。現代のベルギー屈指の海港。フランデル地方の大商工業都市。詳しい注は「破の巻」に譲る。

(22) 女性愛好家のソロモン Salomon der Philologe 父ダヴィデの跡を襲つて全イスラエルの王となつたソロモンはその榮華と富と知恵で有名

〔旧約聖書列王記上〕だが、女性を特に愛好したこと〔列王記上十章一二三節など〕でも知られている。そこでソロモンといえば「女好き」のたとえになる。旧約聖書ソロモンの雅歌は本来、恋を唄い上げる古代イスラエルの若者たちと女たちの歌垣と思われるが、ソロモンが作つたものに擬せられるほど。

さて、これまた実は古代イスラエルの民の間に受け継がれていた教訓・格言・詩の集成であろうが、賢王ソロモンの箴言とされた旧約聖書箴言の最後、三十一章十節「誰か賢き女を見出しがれ」と得ん、その価値は眞珠より尊し」以降に、賢明・有能な妻の理想像が讃えられている。

(23) メーメル在住のあのE***老夫人 当時このほか愛読されたヨハン・ティモテウス・ヘルメス Johann Timoteus Hermes (一七二一八一一) の小説『メーメルからザクセンまでのゾフィーの旅 Sophie's Reise von Memel nach Sachsen [一七七〇一七三]年の五巻本で、一七七五年に六巻本で出版) を指す。うら若い乙女ゾフィーは彼女の養母であるメーメル〔現在リトアニア共和国のクライベダ。当時東プロイセンのメーメル地方の首邑〕在住のE***老夫人に、重要な文書をその実の娘のもとから持ち帰るよう頼まれ、七年戦争の間ロシア軍に占領された東プロイセンの真っ只中を通つてザクセンに使いに出される。良縁を結ばせよとの思惑がE***夫人の動機の一つでもあつた、というムゼーウスの見解だが、これは著者が聞いたときつと否定したことだらう。もつとも道徳的省察でびっしり覆われているこの小説で起つて来る出来事のかなりが、ムゼーウスの言いたいことを裏書きしている。ゾフィーは自分に求婚した二人の男性の間で去就に迷つてゐるうち、結局どちらをも失う。

そして、少なくとも第二版と第三版では憂鬱症のキュップーツ修士と結婚する。
なお七年戦争は第三次シユレージエン戦争(一七五六一六三年)の事。プロイセン国王フリードリヒ二世(大王)が英國と同盟して、オーストリア、ロシア、フランス、スウェーデン、ザクセン(ザクセン王国と二国連合だったボーランドをも含む)および神圣ローマ帝国等族(一七八六年までの帝国議会を構成する諸身分、すなわち諸侯・直轄都市・高位聖職者)の大部分と戦つた。この戦争で五十万の人口が失われ、プロイセンとザクセンの繁栄は衰微した。ただしフリードリヒ二世の名声は極めて高まり、プロイセン王国は押しも押されぬヨーロッパの列強となつた。

(24) バビロンの囚獄 いわゆる「バビロンの捕囚」を指してはいるが、いぶせき小路の小さい部屋を囚獄にたとえたので、語句を変えたのである。

- 新バビロニア王国のネブカドネザル一世は紀元前五九七年ユダ王国の首都エルサレムを陥落させ、ユダ王エホヤキンを始め宮廷人、高級軍人、官僚など上層の者たちをバビロンに連行した。同様のことは紀元前五八七年にも行われる。五三九年ペルシア王国のキヨロス一世がバビロニア国王ナボニドスを破り、バビロンに無血入城すると、翌五八年ユダヤ人のエルサレムへの帰還と神殿の再建を許可した。
- (25) 『乳と蜜の流れる豊饒の国へアライの神がモーセに約束した土地。あるいは、ヘブライ人の考える豊かな土地。「われ降りてかれらをエジプト人の手より救ひいたし之を彼國より導きのぼりて善き広き地乳と蜜の流れる地すなはちカナン人ヘテ人アモリ人ベリジ人ヒビ人エブス人のをる處にいたらしめんとす』(旧約聖書出エジプト記三章八節)。「汝は乳と蜜の流れる地より我らを導き出して曠野に我らを殺さんとする」(旧約聖書民数紀略十六章十三節)。「且また汝は我らを乳と蜜の流れる地にも導きゆかず』(同十四節)。ただしもとよりここでは、何不自由ない豊かな暮らしのたとえ。
- (26) 天体観測者ホロックス der Beobachter Horrocks 姓の綴りに誤り。イギリスの天文学者ジェレマイア・ホロックス Jeremiah Horrocks (一六一九—四二)は一六三九年始めて金星の太陽面通過を観測した。
- (27) 『聖体の行列 カトリック圏では司祭が捧持するきらびやかな容器(聖体顯示台)に入つた聖体を中心に、教区の人々と堅信礼を受ける少年少女が教区を練り歩く。村全体あるいは都市自治体がこれを盛大に祝うのである。練り歩く道筋は、地域にもよるが、彩り豊かな花や緑の葉などで美しく飾られる。このご聖体の祝日(Fronleichnamsfest)は精霊降臨祭の次の日曜日後の木曜日と定められており、いすれにせよ陽光輝く六月ではあるが移動祝日。一二六四年以降法王ウルバン四世によって全教会に導入された。従つて注4ですに記したように、ムゼーウスはブレーメンがまだ宗教改革に曝されていない時期にこの物語を設定していると思われる。
- (28) 化粧室での機嫌伺い 十八世紀のヨーロッパで上流階級の女性たちは寛いだ化粧室に男性客を迎える習俗があつた。もとよりある程度以上親密な相手に限られたし、建て前では小間使いも傍に控えていた。わがアーティストでは召使のこと。
- (29) 奉仕の靈 新約聖書ヘブル人への手紙一章十四節。ただし「」では召使のこと。
- (30) 雅び男 Seladon. 羊飼いの名前。セラドン・セラドン Céladon とは、フランスの作家オノレ・デュルフ Honore d'Urfé (一五六八—一六一五)の書いた、当時非常に有名であり、羊飼い小説という一つのジャンルを作り出した「ラストー」L'Astree [五巻。一六〇七—一七年]の主人公。
- (31) クリストムス Chrysotomus. キリスト教ローマ帝国の首都コンスタンティノポリス(ビザンティウム)の総主教に昇ったヨハネス教父(三四四—四〇七)は、説教が極めて巧みだったので、クリントムス(黄金の口)といふ異名があった。
- (32) キケロ Cicero. テルクス・トゥリウス・キケロ (紀元前一〇六—四三)。ローマの政治家・雄弁家・著述家。
- (33) デモステネス Demosthenes. (紀元前三八四?—三三一一)。アテネの政治家で雄弁家。
- (34) アンフィオン Amphion. ゼウスとアンティオペの息子。ギリシャ神話によればヘルメスから弦楽器演奏の才能を授かつた。テーバイ市建

設の際城壁用の石材がアンフィオンの演奏に感動しておのずと組み合わされたとのこと。

(35) 神聖文字^{ヒエログリフ} 元来古代エジプト人の用いた絵文字のことだが、ムゼーウスは、恋人同士にはちゃんと意味が通じるが、第三者には全く分からぬ通信手段の意味で用いている。

(36) 放蕩息子 プロディガル prodigal。浪費家、道楽者。新約聖書ルカ伝福音書十五章十一—三十一節。

(37) 金細工師 中世ヨーロッパでは金融業を兼ねていた。

(38) シュタイン 重量の単位。「四一二二」ポンド。

(39) 万聖節 諸聖人の祝日。十一月一日。

(40) 一万一千の聖処女 ^{レザンダ}宗教伝説によれば、ブリタニア国王の姫君聖ウルズラがローマへの巡礼に出た折彼女に隨伴した乙女たち。ローマから帰途ケルンを包囲していたファン族の一軍に全て殺戮された、といつ。

(41) 砂糖 砂糖がヨーロッパ人に知られるようになつたのは、十字軍の東方侵攻が機縁であろう。それまでは甘味料としては蜂蜜があるだけだった。知られるようになったとは言え、この時代にはもとより、十八世紀頃から新大陸、とりわけカリブ海域で砂糖収穫栽培と製糖作業が大大的に行われるようになるまで、長いこと貴重品であった。

(42) 柔媚なりユディア調で 中央ハ音から一オクターヴ上のハ音までの音階はギリシャ式音楽体系によればリユディア音階とされていた。これはとりわけ快い響きと感じられた。リュディア音階は中世の教会旋法の一つでもある。

(43) 黄泉の国オルクス ローマ神話の「冥界」。「オルクス」は冥界を治める神の名である。ギリシャ神話の「ハデス」に当たる。

(44) 音曲に優れたオルフェウス ギリシャ神話によれば、オルフェウスはオリュンポス山の近くに住まい、そのたぐいなく素晴らしい歌は、野獣たちや森の樹樹さえ感動させた、とのこと。また、楽器、特に竖琴を発明した、あるいは改良した、とされる。金羊毛を求めるイアソン率いるアルゴー船の遠征にも加わり、美しい声で船乗りを魅了し、難破させる怪物セイレネスに仲間たちがおびき寄せられそうになつた時、これと音樂の勝負を挑み、勝利を収めた。妻エウリュディケが娘に咬まれて死ぬと、オルフェウスは諦めきれず、冥界へ下つて行つた。その妙なる樂の音が全ての障害を退けたのである。冥界の王ハデスも王妃ペルセポネも感動して、彼が妻を連れ帰ることを許した。彼に課されたただ一つの条件は、太陽の光を仰ぐまで決して背後を振り返らぬこと、であった。オルフェウスは感謝し、妻を伴つて冥府を発ち、長く暗い道を歩いて行つた。しかし、そのうちに、本当に妻は隨いて来ているのか、騙されたのではないか、と不安になり、とうとう後ろを振り向いてしまつたのである。エウリュディケは確かに背後にいたが、かすかな叫びを挙げると、姿は見る見るうちに薄れて、消え去つた。オルフェウスはひどく悔し、再び冥府に戻らうとしたが、今度は通してもらえなかつた。

(45) 我らがますらおたちの瘋癲病氣質 「疾風怒濤運動」に対する辛辣なあてこすり。こうした才能の大激發がこの頃はすっかり沈滞したこ

とを充分意識した上でのこと。ムゼークスはシュトルム・ウント・ドラングに従事した文学者たちに極めて反感を持つていた。ゲーテが若きヴァイマル公カール・アウグストの友人として一七七五年ヴァイマルの宮廷に出入りするようになった時、彼と共に、シュトルム・ウント・ドラングの矯激な推進者である戯曲家ヤーコブ・ミヒヤエル・ラインホルト・レンツとフリードリヒ・マクシミリアン・クリンガー〔注11参照〕が、七六年二人ながら追放されるまで僅かな間ではあるがヴァイマルで活動したもの、ヴァイマルの先輩知識人であったムゼークスの感情を大いに逆撫でしたことであろう。

(46) 署 同じ数の連乗積。たとえば十の三乗。

(47) 恋の玉草 *billet doux*. フランス語。恋文。

(48) 間切つているうち 「間切る」とは風帆船が向かい風に逆らつて進む航法。風の向きに対しジグザグに帆走する。なんらかの理由で帆の操作に失敗すれば、前面から風をまともに受け船は立ち往生してしまう。これを「裏帆を打つ」という。

(49) 聖クリストフォルス *der heilige Christoph*. 聖クリストフォルスは十四救難聖人に数えられる。最も人気のある聖人の一人で、あらゆる旅行者の守護聖人である。大抵は幼子イエスを肩に載せ、河を徒歩涉りしている巨大な姿で描かれる。イタリアの教会著述家ヤコブス・デ・ヴォラギネ（一二三〇頃—一二九八）が著した聖人物語集「黄金伝説」によれば、彼はもとレプロバス（祝われし者）という名のカナン地方、すなわち古代パレスチナ西部の人で、世界で最も強力な君主を探し、これに仕えたい、と思ついた。彼はある王の家来になつた。しかしある時この王は、悪魔といふことばを耳にすると、恐れて十字を切つた。レプロバスは、王より悪魔の方が強い、と考え、王のもとを去つて悪魔を探し、これに全身全靈を擧げて仕えた。しかしある時悪魔は十字架を避けた。悪魔は、イエス・キリストが十字架に架けられて死んだ時以来、十字架が恐ろしいのだ、と告白する。レプロバスは悪魔に奉公するのを止めて、キリストを探す。ある砂漠の隠者のもとへ行け、と通りがかりの旅人に教えられたレプロバスはそこへ赴く。隠者は贖罪として近くの危険な大河で旅人を渡してやる苦行を勧める。全ての人の儀になれば、王の中の王、イエス・キリストに会えるだらう、と。長い歳月、数多くの人々に奉仕したあと、幼子イエスが来て、河を渡して欲しい、と頼む。この人口に膚炎した伝説はこういう結果で終わる。肩に載せた子どもはひどく重く、レプロバスが疲労困憊してようやく対岸に着き、「おれは死ぬかと思った。世界中を背負つたような気分だ。もうちょっとでだめだつたろう」と言うと、幼子は答える。「レプロバスよ、そなたは世界以上の者を背負つたのだ。そなたは世界の創り主を背負つたのだよ。私は王イエス・キリストだ」と。これ以来レプロバスはクリストフォルスChristophorus、すなわち「キリストを担える者」と呼ばれるようになつた。

先に記したように、クリストフォルスが旅行者の守護聖人であることは、この伝説の物語る彼の資質からして当然だが、「ホップの王様」が彼を自分の守護者としているのは、麦酒醸造には重量のある原料や製品の運送が必要不可欠なので、こうした立場からであらうか。現代では自動車運転者の守護聖人として有名。多くの運転者が車にこの聖人のメダルを付けている。史実としては、一五〇年頃皇帝デキウスの下で殉教し

た小アジアの人である。聖日は七月二十四日。「ホップの王様」がこの日生まれであれば、守護聖人として崇めるのはもとより当然である。

(50) 政府二請訓スル *Ad referendum.* フラン語。「追つて詳しく政府に報告し、その訓令を仰ぐ」の意。外交用語。

(51) バリの議員諸公 バリの議会は、他のいくつかの都市のそれと同様、ただし、最も有力ではあったが、第一身分（聖職者）、第二身分（貴族）、第三身分（市民）の代表から成る身分制代議員会であった。ルイ十三世時代、一六四一年リシリュウ枢機卿によつて全く無力にされ、フロンドの乱でやつとマザラン枢機卿に抗して立ち上がつたが、ルイ十四世の治世下では何の抵抗もしなかつた。一七一五年太陽王の逝去に伴いその曾孫ルイ十五世が僅か五歳で即位したため、ルイ十四世の甥オルレアン公を攝政に任命してからは、十八世紀を通じてしばしば政府に叛旗を翻し、王の法律あるいは政令の認証を拒み、何度か〔たとえば一七二〇年と一七五二年〕パリから追放された。その後のフランスの議会としては、一七八九年五月五日全国三部会が一六一四年以来一七五年ぶりにヴェルサイユで開かれ、やがて第三身分の代表のみによる国民議会の誕生となり、大革命へと繋がるが、こうしたこととは一七八七年に没したムゼー・ウスのもとより与り知らぬこと。

(52) 三天祝祭 *Crucifixion, Ascension, Pentecost.*

(53) 動物精気 人体内を循環し、微妙な生命機能を営む液体としてかつて信じられた。アリストテレスの動物学的著作に由来する、といわれる。

デカルトにおいては、身体と精神を結びつけるための役割を与えられ、従つてその心身二元論の重要な鍵となる概念。

(54) バシヤンの王オグ ユダヤの伝承にある巨人。旧約聖書では再び言及される。民数紀略二十一章三十三節。申命記二章一節・十一節。巨人であったことは、特にこの十一節で示唆されている。ヨシュア記十三章十二節。バシヤンはカナンの地、すなわちヨルダン河東の地味の肥えた土地の一つ。王オグによって治められていたが、モーセの率いるイスラエルの軍勢に滅ぼされた。良い家畜を産するので有名〔詩篇二十二篇十二節、アモス書四章一節〕。

(55) 終油礼 終油の秘儀。カトリック教で、信徒の臨終に際し、身体の苦痛を減じ、また心身に慰藉を与えるために、死に行く者の身体に聖職者が香油を塗る儀式。

(56) 苦艾酒 *Quassia* 葡萄酒にニガヨモギ〔キク科の灌木状多年生草本〕その他の草根本皮を加えて成分を滲出させ、砂糖で甘みをつけた苦味と芳香のあるリキュール。

(57) ソロモンの素描 原注(3)・訳注21参照。

(58) 都市音樂師たち 都市の祝祭などで演奏する特權を持つていた十五世紀から十八世紀にかけての音樂師。組合を組織して自分たちの権利を擁護していた。

(59) シャルマイ ダブルリードの付いた中世の木管楽器。オーボエの前身。

(60) ヨブの報せ 悲報、凶報。ユダヤの族長ヨブ（イヨブ）は神の試練に遭い、數々の惨事を体験した。旧約聖書ヨブ記。

- (61) 銀梅花の花冠 （シルバーハウス） 銀梅花の枝を編んで挿えた冠。純潔の象徴として花嫁の冠に用いる。
- (62) お祭壇に連れて行く 結婚させる。
- (63) 諸芸術 諸諸の美しい技芸。造形美術の他に文学、音楽も含んだ。
- (64) プラーヴの大学生 プラーヴはプラハのドイツ語名称。プラハは言うまでもなく現代のチェコ共和国の首都。第一次世界大戦後チェコスロヴァキア共和国が独立するまで、ここは「時折中断されたことはあるが」オーストリア、ハンガリーと同君連合を形成していたボヘミア王国の首都であった。ボヘミア王国は一三〇六年までブシェミスル家に治められるが、その男系が断絶すると王位はルクセンブルク家に移り、更に一五二六年この王朝が消滅すると、王位はオーストリア大公フェルディナント、つまりハプスブルク家の手に落ち、これが一九一八年まで継続する。
- （65） ブラーケ（プラハ） 大学は一三四八年神聖ローマ帝国皇帝カール四世「ルクセンブルク家系ボヘミア王ヨーハンの子。ブラーケ生まれ。ボヘミア風に言えばカレル四世」がパリ大学を模して設立した帝國領内では最初の大学である。すなはちドイツの最初の大学と言つてよい。ボヘミアはスラヴ人とゲルマン人が混交しあった土地なので、スラヴ最初の大学とも言えるかも知れないが。
- （66） ブラーケ大学の学生たちが、十五世紀、あるいはその後のどの時代でもよいが、ムゼー・ウスが書いているように、放浪の音楽団を組織して喜捨を求めて回った、というのは未詳。ただし、近世まで、貧乏な大学生が夏休みに旅回りをして、無料の宿と食べ物を稼いだり、貧しい、貧しくないに関わらず、学生が優れた教師を求めて大学から大学へ遍歴の旅をしたのは事実であり、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』にも「放浪の学生」wandernder Student が登場する。往時の大学生の多くは神学生、つまり聖職者の卵だったから、放浪しても周囲から相応にモテなされたのである。なお、大学の上級学部は神学部、法学部、医学部で、自由学科を教える予備的学部が下部にあった。
- （67） マース 一一一リッター。
- （68） 摘似卵 雌鶏の抱卵を誘うために巣の中に入れる人造の卵。ここでは、原注（8）にあるように、旅の資金にした時計が卵に似ていて、この計画が何の成果も生まなかつたことを掛けて、伏線にしている、と思われる。
- （69） 代理祈禱 当人にできない事情がある場合、聖職者に依頼する祈禱。普通病者や罪人のために行なう。
- （70） シュッティング Schutting. シュッティング Schutting はあるが、シュッティングは無い。シュッティングは昔の商人たちの会館で、市庁舎、聖ペテロ大聖堂などとともにブレーメンの中心部を形成していた。

(71) 聖なるアナクの子孫 「その民は汝なきが知しところのアナクの子孫しらえにして大きくかつ身長おほたかし」(旧約聖書申命記九章二節)。「アナクの子孫しらえ」とは、ヘブロンから遠からぬ南カナンに住んでいた臣人民族。イスラエルの民はヨルダン河を西岸から東岸へと渡り、この人々の建てた町町を滅ぼした。

(一〇〇四年九月七日 受理)